

こまちこしきのほら
小町越城野原第11遺跡
現地説明会資料



A区 横穴式石室1 (西から)

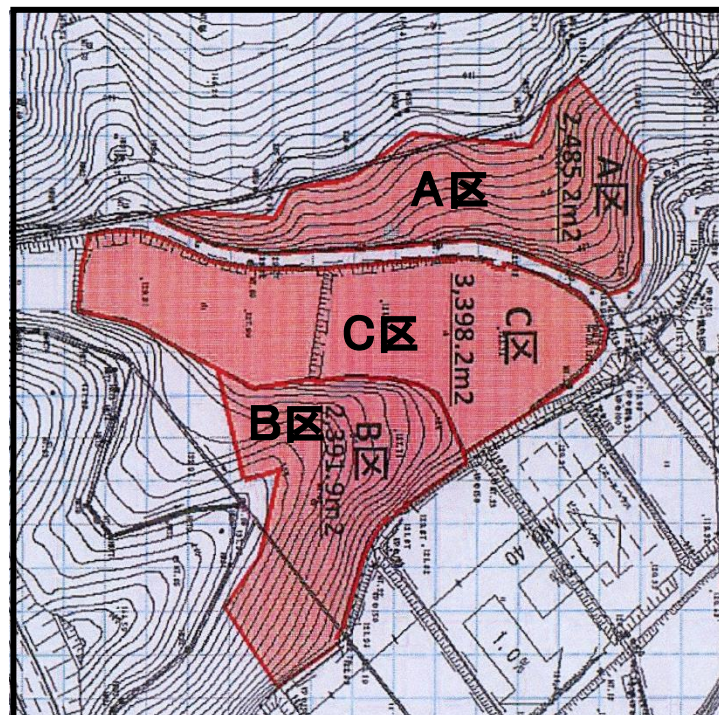
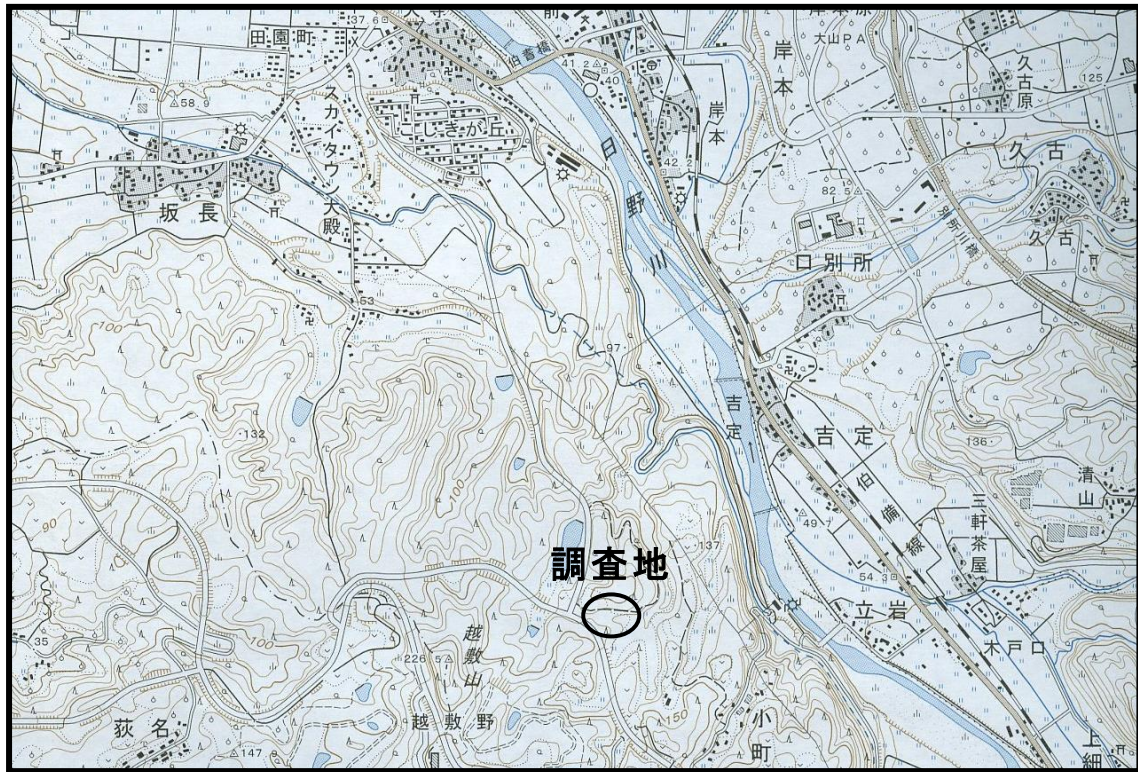
令和5年(2023年)12月16日(土)

(一財) 米子市文化財団

1. 小町越城野原第11遺跡の位置

小町越城野原第11遺跡は、西伯郡伯耆町小町に所在します。

遺跡は、日野川左岸の標高226mを山頂とする越敷山塊から東へのびる2つの丘陵とこれらの丘陵に挟まれた谷部に位置します。



第1図 調査地位置図

2. 調査の概要

今回の調査は、北側の丘陵をA区、南側の丘陵をB区、これらの丘陵に挟まれた谷部をC区として、3つの調査区に分けて調査を行っています。なお、C区は調査が終了し、一部を残して埋め戻しを行っています。

今回の調査では、縄文時代晩期（3200～2400年前）と古墳時代終末期（7世紀）の大きく2時期の遺構を検出しています。

3. 調査の成果

(1) A 区

A区は、調査地の北側に位置する西から東へのびる丘陵で、遺構は丘陵の南側斜面に集中し、横穴式石室3基、石棺墓3基、石蓋土壙墓1基、竪穴建物跡1棟、段状遺構10基、竪穴状遺構7基を検出しました。

①横穴式石室

横穴式石室は、丘陵の南側斜面で3基を検出しました。いずれも等高線に直交するように配置され、南に開口しています。

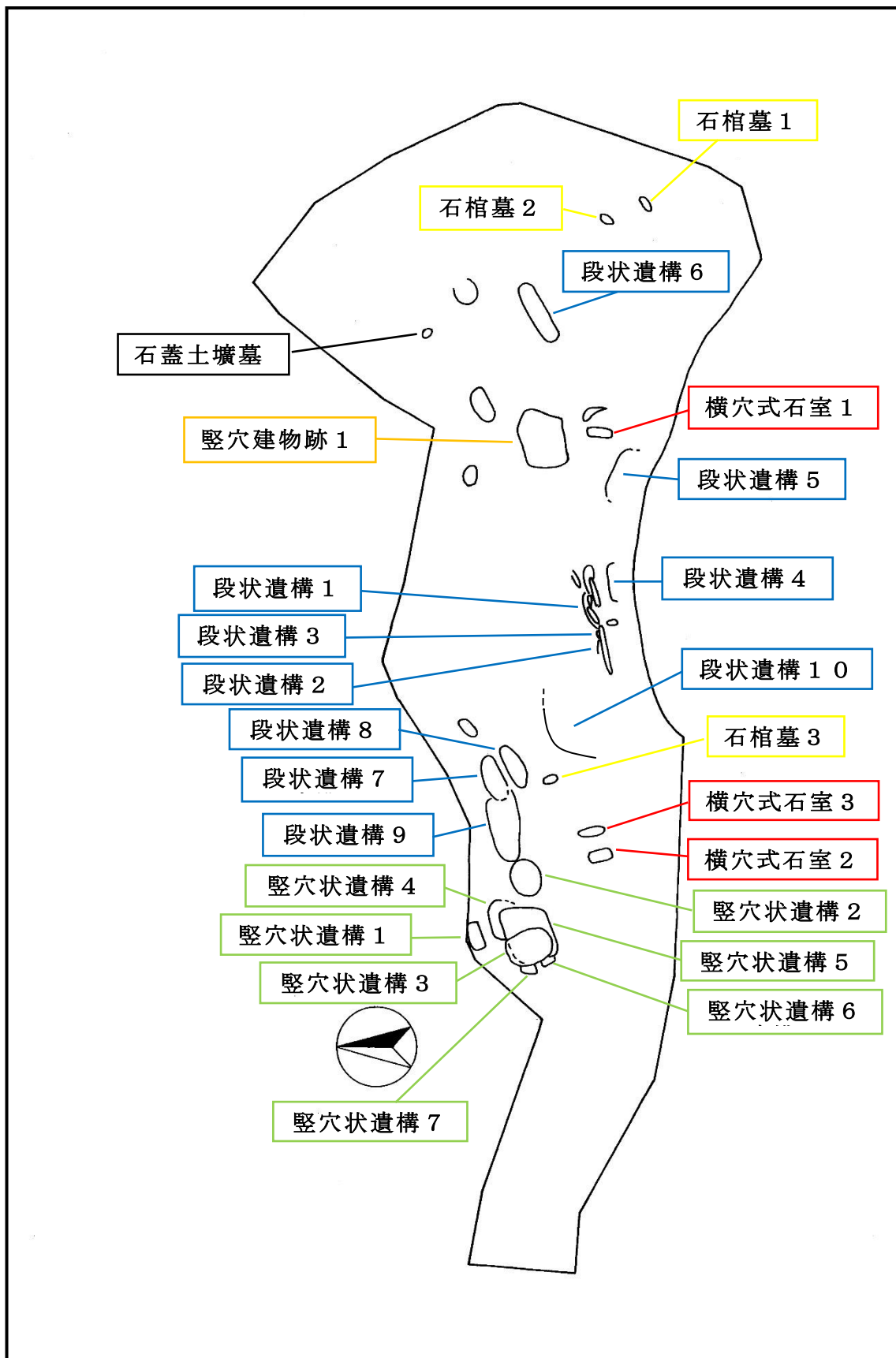
横穴式石室 1

横穴式石室1は、全長1.9m、幅0.6m、高さ0.6mを測る小型の石室で、玄室と羨道の幅が同じとなっています。奥壁と西側の側壁は、1枚の石で築かれていますが、東側の側壁は、下段に横長の石を2つ置き、その上に高さを揃えるために、複数枚の板状の石を積み重ねています。床面には板状の石を敷き詰め、両側の壁際の相対するような位置に須恵器の坏身を伏せた状態で置き、入口の近くには須恵器の長頸壺が横転した状態で出土しています。また、石室の北側には、弧状にめぐる周溝状の遺構があり、その形態から直径6m程度の円墳と推定されます。

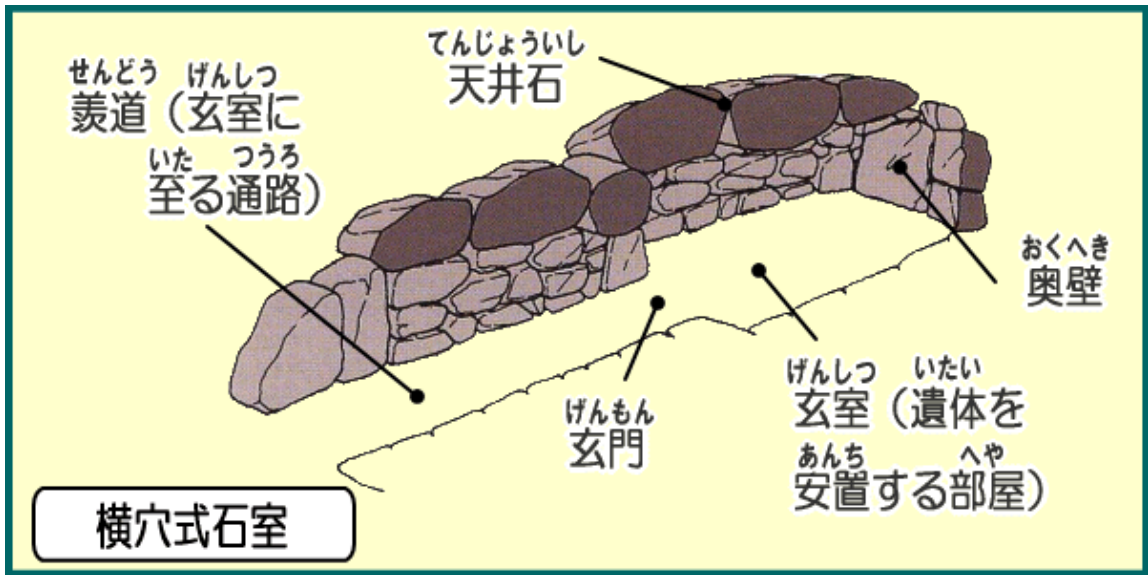
本遺構の時期は、出土した土器から7世紀後半頃と考えられます。

横穴式石室 2

横穴式石室2は、現在調査中ですが、全長2.4m、幅0.75mを測る小型の石室です。羨道と玄室との境界付近には板状の天井石が1枚架けられ、玄室の側壁は板状の石を用いて、持ち送り状に積み上げられていると推測されます。



第 2 図 A 区遺構分布図 (1 : 6 0 0)



第 3 図 横穴式石室模式図



横穴式石室 1 (南から)



橫穴式石室 1 西側側壁



橫穴式石室 1 東側側壁

横穴式石室 3

横穴式石室 3 は、現在調査中ですが、全長 2.8m、幅 0.5m を測る小型の石室で、玄室と羨道の幅が同じとなっています。

玄室と羨道との境界付近には 2 枚の板状の石が立てられ、玄室と羨道を区切っていると考えられます。また、羨道の入口は、板状の 1 枚の石で閉塞しています。



横穴式石室 2



横穴式石室 3

②石棺墓

石棺墓は、丘陵先端の北側斜面で2基、南側の斜面で1基を検出しました。いずれも等高線に直交するように配置されています。

石棺墓1

石棺墓1は、丘陵先端の北側斜面の石棺墓2の東4mに位置し、東側の側壁と北側の小口が失われていますが、現状で長さ1.1m、幅0.2m、深さ0.35mを測ります。

遺物は、須恵器の細片が1点出土したのみです。

石棺墓2

石棺墓2は、丘陵先端の北側斜面の石棺墓1の西4mに位置し、東側の側壁が内側に倒れ込んでいますが、現状で長さ1.0m、幅0.3m、深さ0.3mを測ります。

遺物は、出土しませんでした。

石棺墓3

石棺墓3は、丘陵の南側斜面に位置し、木の根によって一部が壊され、南側の小口が失われていますが、現状で長さ0.9m、幅0.45mを測ります。

遺物は、出土しませんでした。



石棺墓1



石棺墓2



石棺墓3

③石蓋土壙墓

石蓋土壙墓は、長さ 1.1m、幅 0.7m、深さ 0.1m の土壙の上に 5 枚の板状の石が並べられていました。

遺物は、出土しませんでした。



石蓋土壙墓

④堅穴建物跡

堅穴建物跡 1

堅穴建物跡 1 は、丘陵の先端部付近に位置します。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長 6.1m、南北長 4.8m、深さ 0.5m を測ります。床面には 4 本の柱穴があり、4 本柱の建物であったと考えられます。

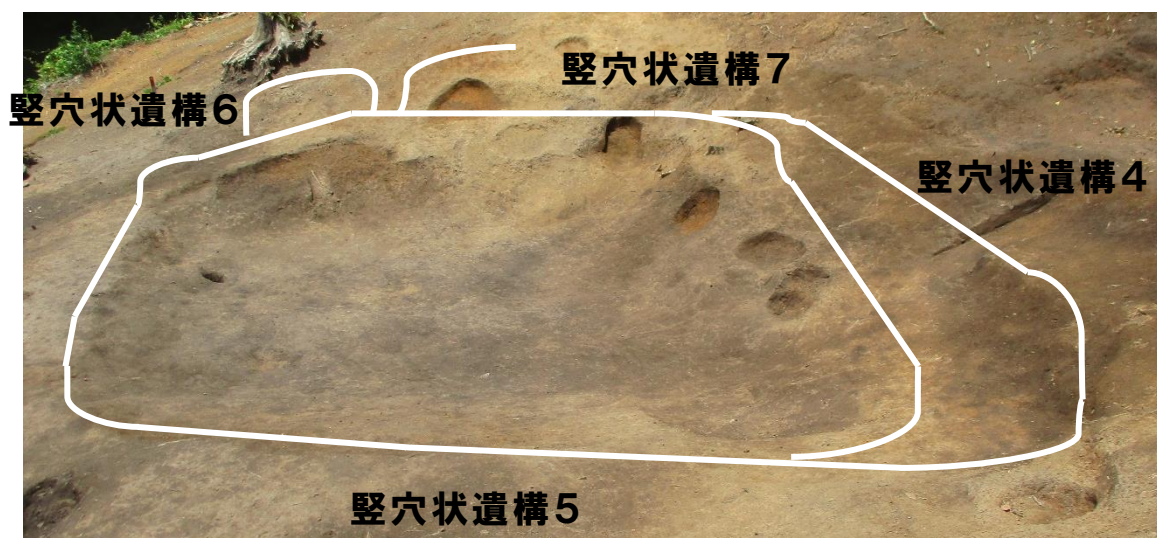
本遺構の時期は、出土した土器から 7 世紀前半頃と考えられます。

⑤堅穴状遺構

堅穴状遺構 1～7

堅穴状遺構 1～7 は、調査区の西側の南から北へ入り込む谷部に、隣接あるいは重なり合うように 7 基が位置しており、数回の造り直しが行われたと考えられます。なお、堅穴状遺構 4～7 は、堅穴状遺構 4→5→6・7 の順に構築されたと考えられます。

これらの遺構の時期は、出土遺物から 7 世紀前半頃と考えられます。



堅穴状遺構 4～7

⑥段状遺構

段状遺構は、丘陵の先端部付近で1基、南から北へ入り込む調査区中央の谷部で6基、調査区の中央と西側の谷部の間の尾根部で3基を検出しました。

段状遺構 1～5

段状遺構 1～5 は、調査区中央の南から北へ入り込む谷部で検出し、現在は調査が終了して、排土置き場になっていますが、5基の段状遺構が東西方向に重複しており、性格はよくわかりませんが、段状遺構の平坦面には、石を1ヶ所に集積した集石遺構3基と石を弧状に並べた石列1基を検出しました。

これらの遺構の時期は、出土遺物から7世紀前半と考えられます。

段状遺構 6

段状遺構 6 は、丘陵の先端部付近に位置し、長さ 6.9m、幅 2.0m を測ります。

遺物は出土しませんでした。



段状遺構 1～5 の平坦面の集石と石列

段状遺構 7～9

段状遺構 7～9 は、中央と西側の谷部の間の尾根部に位置し、段状遺構 7 と段状遺構 9 は東西に繋がるように、段状遺構 8 は段状遺構 7 の南側に平行するように築かれています。規模は、段状遺構 7 が長さ 3.5m、幅 1.9m、段状遺構 8 が長さ 5.4m、幅 2.0m、段状遺構 9 が長さ 7.6m、幅 3.3m を測ります。

これらの遺構の時期は、出土遺物から 7 世紀前半頃と考えられます。

段状遺構 10

段状遺構 10 は、調査区中央の南から北へ入り込む谷部で検出しました。段状遺構 1～5 の北側に位置し、その関係が窺われます。現在調査中のため、規模等は不明です。

本遺構の時期は、出土した土器から 7 世紀前半頃と考えられます。

(2) B 区

B 区は、調査地の南側に位置する西から東へのびる丘陵で、陥し穴(おとしあな) 1 基、竪穴建物跡 12 棟、段状遺構 7 基を検出しました。

① 陥し穴 4

陥し穴 4 は、丘陵の東側斜面の上部で検出しました。平面形態は円形を呈し、規模は直径 0.9m、深さ 0.6m を測ります。底面には先端を尖らせた杭を逆さまにして差し込む小さい穴があります。

本遺構の時期は、縄文時代晩期と推定されます。

② 竪穴建物跡

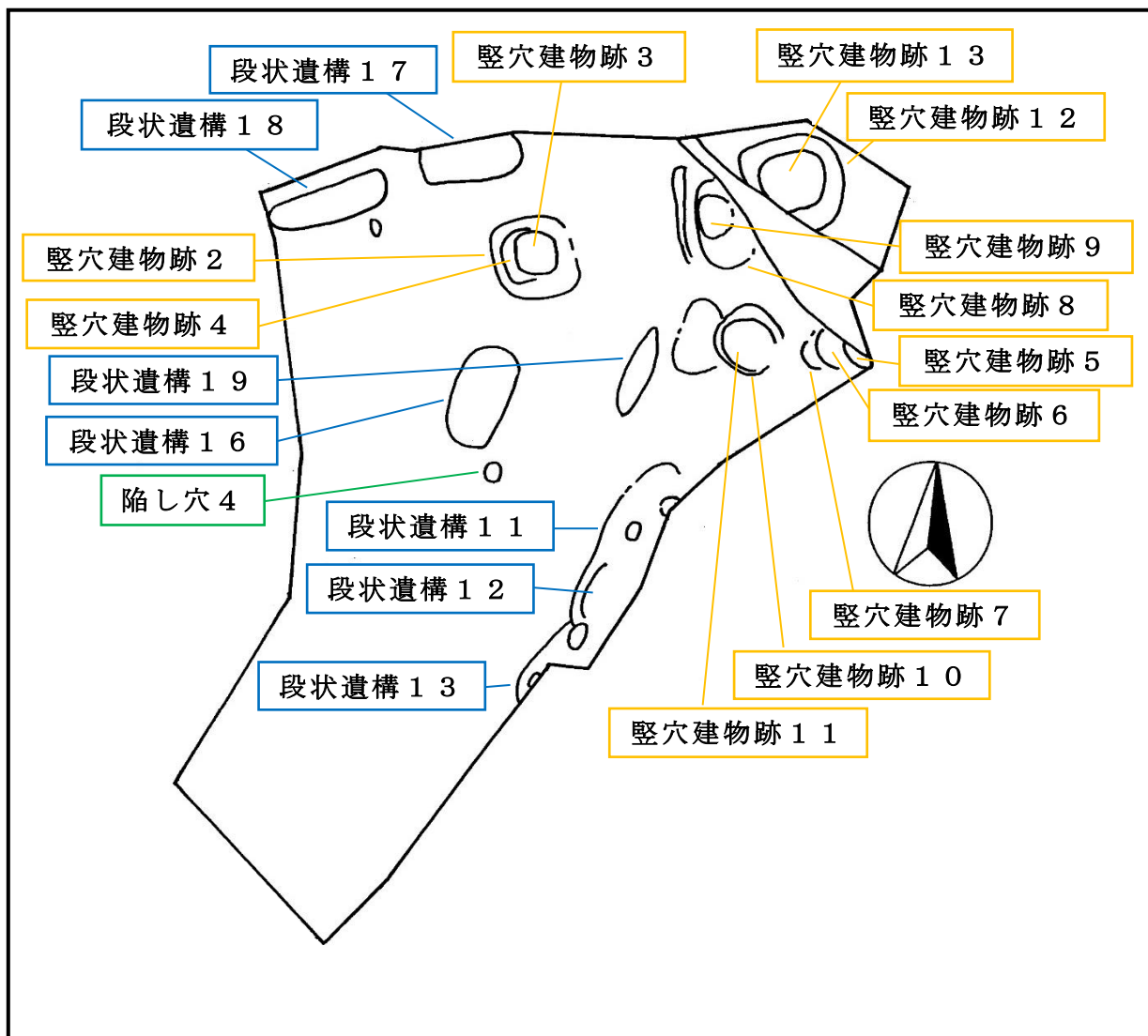
竪穴建物跡は、丘陵の頂部に 1 ヶ所、丘陵斜面中腹に 4 カ所あり、各々、同じ場所で 1～2 回の建て替えを行っています。調査を行った範囲では、5 棟で集落を形成していたと考えられます。

竪穴建物跡 2～4

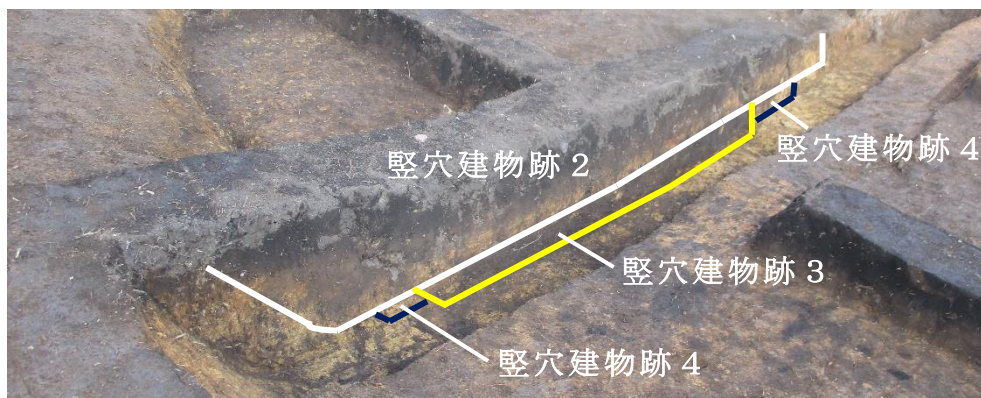
竪穴建物跡 2～4 は、丘陵の頂部の先端で検出しました。同じ位置に 3 棟が重複しており、竪穴建物跡 4 → 竪穴建物跡 3 → 竪穴建物跡 2 と建て替えが行われています。

いずれの竪穴建物跡も平面形態は方形を呈し、古い竪穴建物跡を人為的に埋めて、新しい竪穴建物跡を構築しています。また、各竪穴建物跡の柱の数は、竪穴建物跡 4 が 2 本、竪穴建物跡 3 が 0 本、竪穴建物跡 2 が 4 本となっています。

これらの時期は、出土した土器から 7 世紀前半頃と考えられます。



第4図 B区遺構分布図 (1 : 500)

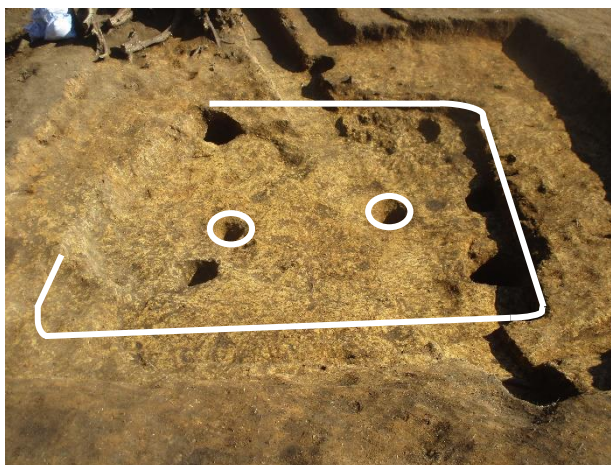


竪穴建物跡 2 ~ 4 土層断面図

竪穴建物跡 5～7

竪穴建物跡 5～7 は、東側斜面の中腹の北側で検出しました。同じ位置に3棟が重複しており、竪穴建物跡 5 が埋没した後に、床に地山の土を貼り付けて竪穴建物跡 6 を構築しています。

これらの遺構からは遺物は出土しませんでした。



竪穴建物跡 4

竪穴建物跡 8・9

竪穴建物跡 8・9 は、丘陵の先端の中腹で検出しました。同じ位置に2棟が重複しており、竪穴建物跡 9 が埋没した後に竪穴建物跡 8 を構築しています。

また、南側の斜面には2段の段が設けられています。

これらの遺構の時期は、出土した土器から7世紀前半頃と考えられます。



竪穴建物跡 3

竪穴建物跡 10・11

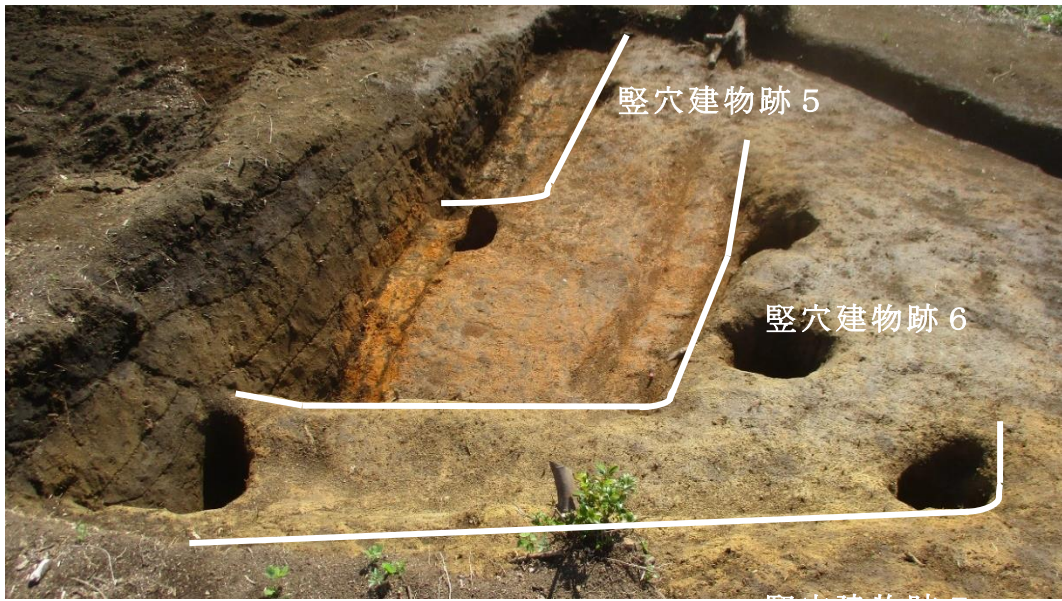
竪穴建物跡 10・11 は、丘陵東側斜面中腹の北側で検出しました。同じ位置に2棟が重複しており、竪穴建物跡 11 が埋没した後に、床に地山の土を貼り付けて竪穴建物跡 10 を構築しています。

また、両竪穴建物跡の中央には炉跡があります。

これらの時期は、出土した土器から7世紀前半頃と考えられます。



竪穴建物跡 2



竪穴建物跡 5 ~ 7



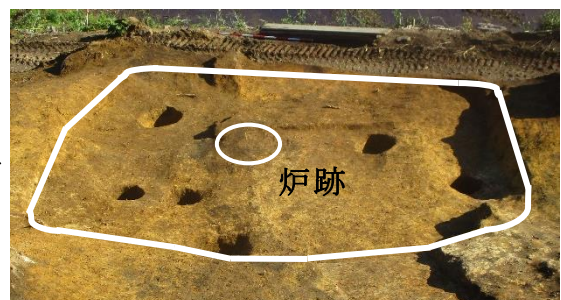
竪穴建物跡 9



竪穴建物跡 8



竪穴建物跡 1 1



竪穴建物跡 1 0

竪穴建物跡 1 2 ・ 1 3

竪穴建物跡 1 2 ・ 1 3 は、丘陵の先端の中腹で検出しました。同じ位置に 2 棟が重複しており、竪穴建物跡 1 3 が埋没した後に竪穴建物跡 1 2 を構築しています。

本遺構の時期は、出土した土器から 7 世紀前半頃と考えられます。

③ 段状遺構

段状遺構は、丘陵の頂部で1基、丘陵の東側斜面の中腹で4基、西側斜面の中腹で2基を検出しました。

段状遺構 1 1～1 3

段状遺構 1 1～1 3 は、東側斜面の中腹で南北方向に連続して検出しました。

これらの遺構の時期は、出土遺物から7世紀前半頃と考えられます。

段状遺構 1 6

段状遺構 1 6 は、頂部の北側で検出しました。近くに竪穴建物跡 2～4があり、何らかの関係が窺えます。

遺物は出土しませんでした。

段状遺構 1 7・1 8

段状遺構 1 7・1 8 は、丘陵の西側斜面の中腹で、南北方向に並ぶように検出しました。いずれも平面形態は隅丸長方形を呈し、段状遺構 1 8の東側の壁際からは移動式竈（いどうしきかまど）が出土しました。

これらの遺構の時期は、出土遺物から7世紀前半頃と考えられます。



段状遺構 1 8 移動式竈出土状況



出土状況拡大

段状遺構 1 9

段状遺構 1 9 は、丘陵の東側斜面の中腹で検出しました。北側は植林地の造成で削られていますが、壁際には溝があります。

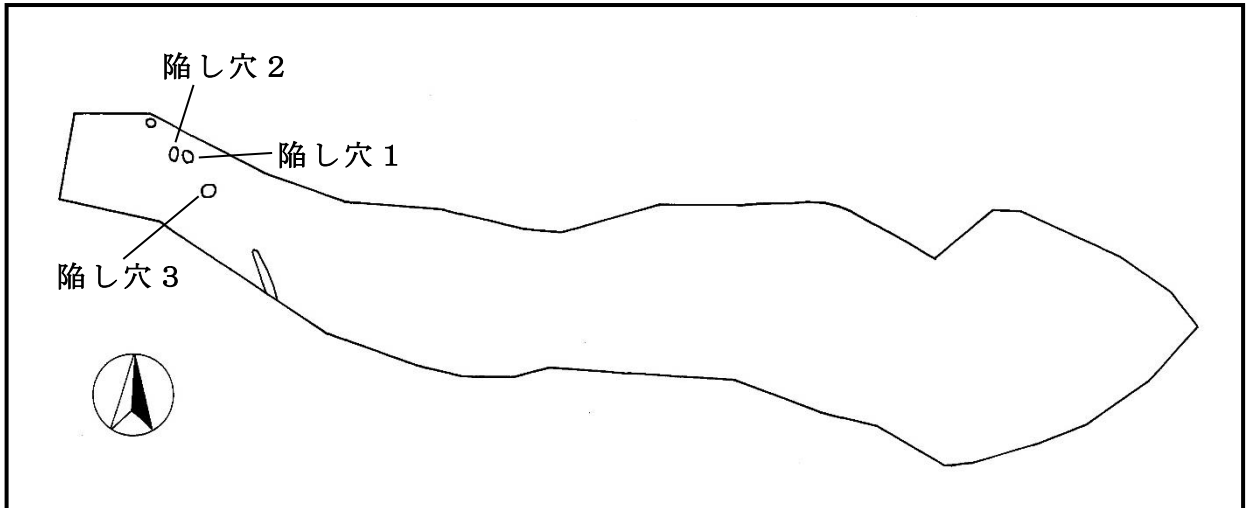
本遺構の時期は、出土した土器から7世紀前半頃と考えられます。

(3) C 区

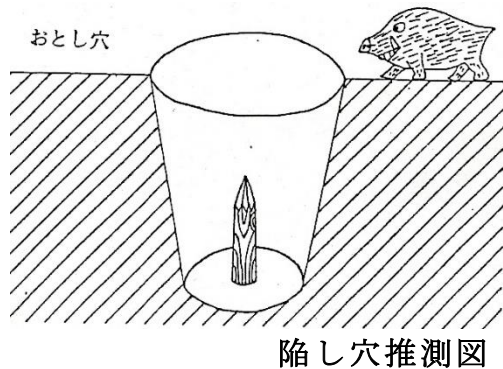
C区は、A区とB区の丘陵に挟まれた谷部に位置します。

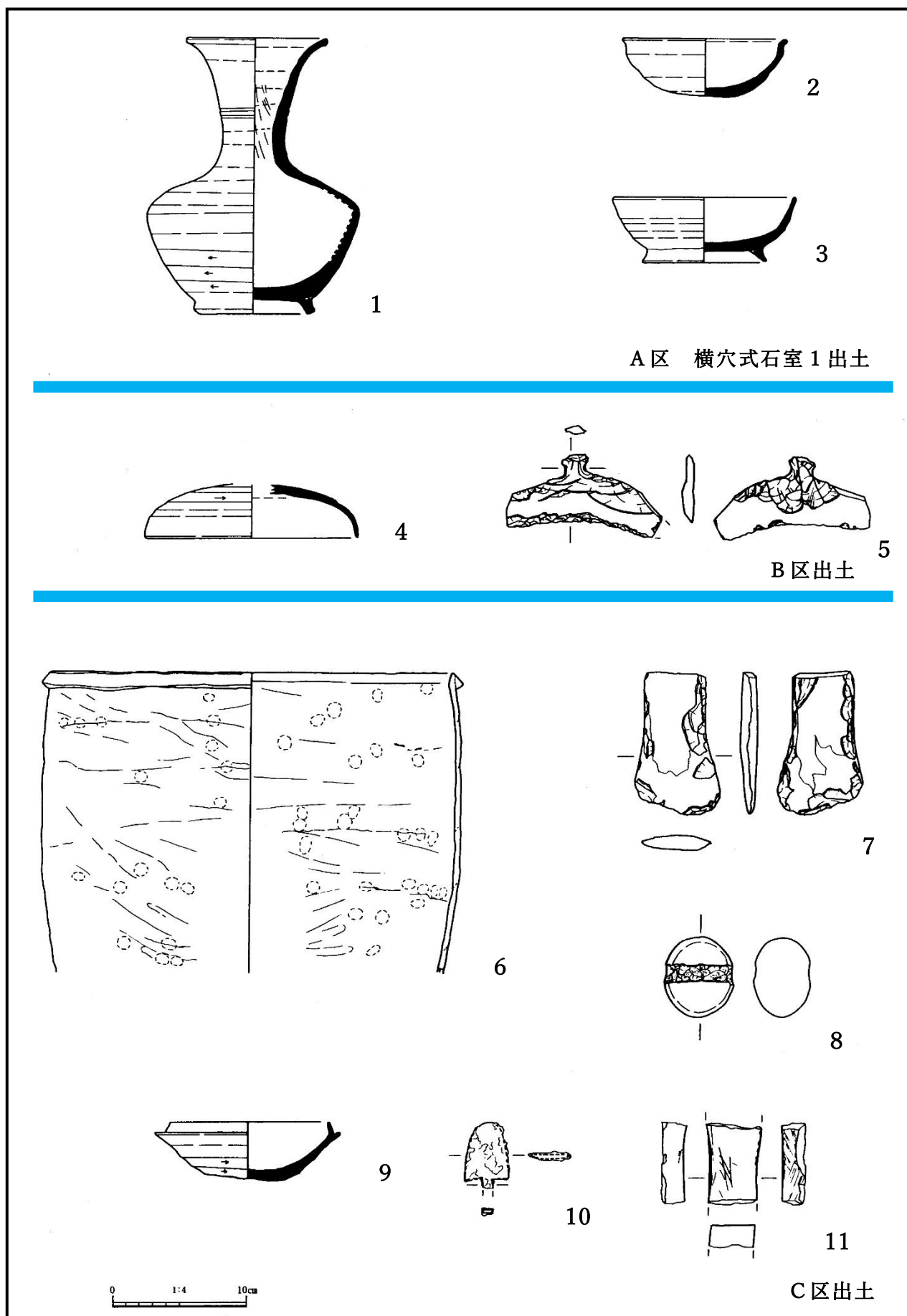
C区からは縄文時代晩期の突帯文土器が比較的まとまって出土し、縄文時代晩期と推定される陥し穴（おとしあな）を3基検出しました。

陥し穴の底面には、先端を尖らせた杭を逆さまにして差し込む小さい穴が、陥し穴1では2つ、陥し穴2と陥し穴3では1つあります



第5図 C区遺構分布図 (1 : 800)





第6图 出土遺物実測図

(4) 出土遺物

① 縄文時代晩期

突帯文土器（縄文土器）、石鍬（いしぐわ）、石匙（いしさじ）
石錘（せきすい：漁網のおもり）、石鏃の未製品

② 古墳時代中期～終末期

土師器（はじき）、須恵器（すえき）、移動式竈（いどうしきかまど）
甗（こしき）、ミニチュア土器、鉄鏃（てつぞく：矢じり）
砥石（といし）

4. ま と め

(1) 縄文時代晩期（3200～2400年前）

縄文時代晩期には、陥し穴（おとしあな）が4基検出され、この時期の土器が多く出土していることから、この時期には、調査地周辺での人々の活動が窺えます。

(2) 古墳時代中期～後期（5世紀～6世紀）

古墳時代中期～後期には、この時期の遺構は検出されませんでした。この時期の土器が一定量出土しています。

越敷山麓にある古墳群では、古墳時代前期後半から後期前半にかけて古墳がつくられ、特に古墳時代中期に盛んに古墳がつくられます。調査区外には、石棺が露出しているところがあり、調査地内はかなり削られていると考えられ、これらの土器は、調査区外にあるこの時期の古墳や調査地内の削られて失われた古墳に伴うものと考えられます。

(3) 古墳時代終末期（7世紀）

7世紀前半には集落が形成されます。調査区の西側では、遺構や遺物は確認されておらず、丘陵の先端に竪穴建物跡5棟で構成される集落が形成されたと考えられます。

また、7世紀後半になると、集落は廃絶し、古墳がつくられます。越敷山麓にある古墳は、古墳時代前期後半から中期後半には丘陵上につくられますが、古墳時代後期後半になると、古墳はつくられなくなり、古墳時代終末期になると、再び古墳がつくられるようになります。

古墳時代終末期の古墳は、丘陵の縁辺部につくられるという立地的な特徴があり、本遺跡の古墳（横穴式石室）も同様な立地形態となっています。